

京 都 光 華 女 子 大 学
研究紀要 第45号 抜刷
平成19年12月 5 日 発行

『寓話集』 に対する揶揄・批判をめぐって

森 井 正 史

『寓話集』 に対する揶揄・批判をめぐって

森 井 正 史

前書き

ジャン・ドゥ・ラ・フォンテーヌJean de La Fontaine (1621-1695) の『寓話集』*Fables*は、第1集の発表当時から高く評価され、フランスにおいてはイソップ寓話そのものにとって代わり、今日まで学校などで古典として学ばれてきているが、その一方で『寓話集』に対する批判が全く無かったのではない。人間を動物に譬えること自体に対する揶揄や、子供にとっての教訓の曖昧さ、寓話として描かれている動物（昆虫）の有り様と事実の違いに関する事などである。本論では、ラ・フォンテーヌの同時代人による揶揄・批判とそれに対する反論、18世紀の啓蒙思想家ジャン=ジャック・ルソーJean-Jacques Rousseauによる批判と、昆虫学者ジャン=アンリ・ファブルJean-Henri Fabre (1823-1915) による批判を中心に取り上げ、それぞれ、何が問題となっているのか、また、問題の原因は何かということについて考察したい。

1. 17世紀の唯物論的動物観

ラ・フォンテーヌの『寓話集』に登場する動物や植物は、言うまでもなく擬人化されたものであり、動物の実態と一致しなくても特に問題はないかと思われる。が、この寓話風が発表された17世紀においては必ずしもそうではなかったのである。まず、この点について考察しよう。

動物というものは理性を持たない単なる機械のようなものでしかない、という当時としては新しい考え方が、17世紀の哲学者たちの間のみならず、貴族や社交界の人々の間にも広がっていたと批評家イポリット・テーヌHippolyte

Taine (1828–1893) は指摘している。^(注1)『寓話集』が世に出された当時、動物機械論的な考えが、既にルネ・デカルトRené Descartes (1596–1650) によって表明され、当時の社交界にも広がっていたのである。デカルトによれば、人間の身体le corps humainは動物と同じく一種の自動機械automateのようなものであるが、人間は動物とは異なり理性la raisonを持っている。そのことは人間の言語や人間に固有の行動に認められる。が動物は、人間のように言葉paroleや記号signeを用いて談話discoursを組み立て、自分の考えpenséeを他人に伝えることはできない。自分の前で言われることの意味に応じて言葉を様々な配列し答えることもできない。カササギやオウムが言葉を発するのは器官の配置によって発しているだけである。また、動物が人間より巧みな行動をすることはあっても、精神espritを持つことを証明するものではなく、動物のうちにある自然が動物の諸器官の配置に従って働いているのであり、あたかも時計その他の自動機械が歯車roueとゼンマイressortから組み立てられていて、時計が正確に時刻を数えることができるようなものである。このように、デカルトは考えていたのである。動物は理性も言葉も持っていないという点で、人間と明確に区別されているのである。^(注2) ついでながら、神の存在については、デカルトは、なんらかの物体や、完全なものではない人間が存在する以上、完全なる存在者としての神に依存せざるをえず、神なくしては一瞬たりとも存続しえないであろうと考え、人間の上位に神が存在しなければならないと考えていたようである。「創世記」(『旧約聖書』) が示しているように、神と人間と自然が明確に区別され、人間は神と自然の中間に位置し、人間は自然に対して支配権を持つというのが、大まかに言って、中世以来のキリスト教的世界観であると言えよう。デカルトは、そうした世界観を宗教的権威によらずに、合理的思考によって説明したとすることができるであろう。

ラ・フォンテーヌの『寓話集』に対する同時代の一部の人間による揶揄・嘲弄には、上記のようなデカルト流の唯物論的動物観が自然や動物に対する優越感を助長していたという背景があったのである。

しかし、自然に対するそうした人間の優位にうぬぼれることに警鐘を鳴らし

ていた思想家が既に存在したことも、忘れてはならないであろう。時代は遡るが、フランス・ルネサンス期（16世紀）の思想家モンテーニュは、『エッセー』*Essais*で、人間が人間以外の被造物つまり自然に対して優位であり、神に代わって支配権を持つと考えるのは人間の思い上がりであると、人間の思い上がりに対して警告を発している。^(注3)

2. 動物機械論に対するラ・フォンテーヌの反論

『寓話集』は第1集（1668）が出版され、好評を得、その10年後に第2集（1678）が刊行されている。第2集になると、インドその他オリエントの小話を素材としたものが増え、また、当時の出来事や思想などを題材にしたものも含まれており、第1集より創作の度が強くなっている。注目すべきは、第2集の中で、ラ・フォンテーヌが、当時の哲学、特にデカルトとその一派の動物についての唯物論的な考え方、即ち動物機械論に反論している点である。

エミール・ファゲÉmile Faguetの評論*La Fontaine* (1913)によれば、ラ・フォンテーヌは、動物が単なる機械であり、ゼンマイ仕掛けで動いて音を出す時計のようなものでしかないという考えに憤慨したという。^(注4) ファゲが、そのようないきさつをどのようにして知ったのか定かでないが、いずれにせよ、動物寓話の書き手（あるいは翻案者）としては、動物が機械のようなものと言われることは、動物を擬人化すること、もしくはそのような作品を書く（翻案する）ことがナンセンスだと揶揄されているのと同じことなのである。少なくともラ・フォンテーヌにとって看過できないことであったということは、彼が『寓話集』の『ラ・サブリエール夫人への話』*Discours à Madame de la Sablière*で、動物機械論的なものの見方に反論していることから明らかである。^(注5) では、この寓話の中で、どのように反論しているか見てみよう。

動物は機械であり、時計のようなものでなく、歯車が精神の代わりをし、最初の歯車が第二の歯車を動かし、三番目のが続いて最後に音を出す、というデカルト派の考えに対して、ラ・フォンテーヌ（語り手）は、鹿やシャコの例を挙げ、動物も理性を持ち、考えていると主張し、さらに鼠も、人間と同じ型

の理性ではないが、理性に近いものを持っているとしている。さらに『寓話集』の『二十日鼠と梟』*Les Souris et le Chat-huant*の中で、デカルト派の学者が梟を時計だの、機械だのと主張していることに対して、ラ・フォンテーヌは、梟が、捕まえた複数の二十日鼠の脚を切って巣から逃げられないようにしておいて、一度に全部は食べずに1日に1匹ずつ食べていったということを根拠にして、梟が理性をもっていないとは言えないと（寓話の中でだが）真剣に反論している。^(注6) 寓話の登場者である動物は擬人化されたものであるのだから、動物が理性を持ち、言葉を発するということは、容易に納得できることであろう。それ故、このような論争は、今日では取るに足りない問題であるように思われるが、17世紀フランスの古典主義の時代には文学作品（特に悲劇作品）に本当らしさla vraisemblanceや理性la raisonにかなっていることが、何かにつけ求められていた時代のことである。ラ・フォンテーヌの挙げた反証がどの程度有効であるのかどうかということは別として、彼は動物を擬人化することに一定の根拠があるということを示そうとしたのである。

3. ルソーによる批判

『寓話集』が発行されてからおよそ1世紀後経た頃、ルソーが『エミールあるいは教育について』*Émile, ou De l'éducation* (1762)（以後、『エミール』と呼ぶこととする）の中で、ラ・フォンテーヌを批判している。^(注7) この作品の内容は、架空の生徒エミール少年が一人前の人間になるまで、家庭教師である「私」が自分の理想とする教育理論に従って教育する、というものであり、「私」によって語られている。題名が暗示しているように、小説fictionと論文traitéが合体したハイブリッドな作品であり、“論文-小説” un taité-romanまたは“小説的論文” un taité romanesqueと呼ばれている。一つの物語であると同時に何らかの理論や主義を扱う作品は、啓蒙思想les Lumièresの世紀（18世紀）においては必ずしも珍しいものではなく、ヴォルテールの哲学的コント『キャンディードあるいは楽観主義』*Candide ou l'optimisme*もその例であり、一時期とはいえ、少しは流行していたのである。^(注8)

ルソーが『エミール』で主張しているのは、子供の身体、感覚器官、精神の発達段階に応じて教育することの必要性であり、その一つとして、ラ・フォンテーヌの寓話を取り上げ、子供（10才あるいは12歳位までの子供）に教えるには難しすぎるということを具体例を挙げて説明しているのである。が、ラ・フォンテーヌの寓話そのものを批判しているのではない。ただ、この寓話を、子どもがまだ十分に理解できない頃から学ばせたり、暗唱させたりすることに反対しているのである。ルソーによれば、子供は、単に理解できないということに終わらず、美徳ではなく悪徳を学びとってしまう恐れがあるからである。

《On fait apprendre les fables de La Fontaine à tous les enfants, et il n'y en a pas un seul qui les entende ; quand ils les entendraient ce seroit encore pis, car la morale en est tellement mêlée et si disproportionnée à leur âge qu'elle les porteroit plus au vice qu'à la vertu.》「子供は皆、ラ・フォンテーヌの寓話を習わされるが、それらを理解できるものは誰一人いない。子供がそれらを理解したとしたら、なおさら具合が悪い。というのは、道徳があれこれと混じりこんでいるため、また、子供の年齢とは不釣り合いであるため、子供を美徳よりも悪徳へと導くことになるからである。」^(注9)

ラ・フォンテーヌの寓話が、韻文の簡潔でリズムカルな表現が子供にも覚えやすくなっている点や、動物を登場させたりしている点が、子供にとって取りつきやすく楽しいものになっているということは、ルソーも認めているのであるが、同時にそうした詩の言い回しが、子供にとって難解なものになってしまっている（《on achete aggrément aux dépens de la clarté》「分かりやすさを犠牲にして楽しいものになっている」）と、ラ・フォンテーヌの寓話がアンビヴァランスを内包していることを指摘しているのである。^(注10)

では、どのように難しいのか、ルソーの指摘を考察しよう。彼は、ラ・フォンテーヌの寓話（第1集）の中から、（彼の言うには）優れて子供らしい純朴さが光っていて、教訓があらゆる年齢に向いていて、子供が一番よく理解する寓話、また子供が一番喜んで学ぼう、作者（翻案者）が好んで巻頭に置いた

寓話を、五つ例に挙げている。

彼が批判の内容を大別すれば、①（子供が学んだり経験したりしていないため）単語や言い回しそのものの意味を理解したり、言葉が表す行為そのものの意味を子供が理解することが難しい点が含まれること、②詩に固有な技法の説明を子供にすることが難しいこと、③会話のやり取りの微妙さを子供が理解することが難しいこと、④寓話で描かれている動物の生態が事実と異なること、となる。

以下、ルソーの指摘を具体的に見てみよう。まず、ルソーは『烏と狐』*Le Corbeau et le Renard*（『寓話集』第1集の第2番目の寓話）の詩句を具体的に取り上げ説明する。例えば、この寓話の《*Maître Corbeau sur un arbre perché*》「烏さんがとまっていた、木の枝に」という表現の中の《*Maître*》という語自体、何を意味しているのか、また、この語が固有名詞（*Corbeau*のこと）の前では何を意味するのか、この寓話の場合はどのような意味を持っているのかということを、子供は理解できないとルソーは批判する（①）。この《*Maître*》という語に関しては、ルソーの同時代人が、ルソーの方が間違っていて、子供にも理解できたと反証を挙げて説明している。^(注11)この点は、いずれが正しいのか判断しがたい。いずれにせよ、この語は、この寓話が書かれた当時、既に、司法官などに対して用いられていた敬称であり、作者（翻案者）である詩人ラ・フォンテーヌが、面白おかしくするために動物にこの敬称を付けていることは明らかである。仏語辞典*Le Grand Robert de la Langue Française*によれば、この《*Maître*》という語は、古い用法として（姓または個人名を伴い）《*Monsieur*》と呼ぶことのできない男性に親しみをこめて、かつて付けられた呼称であり、19世紀にも、なお、農民、職人に付けられた敬称である。これを、詩人が、《*Maître Corbeau*》とか《*Maître Renard*》というように、面白おかしくなるよう用いているのである。^(注12)

次に、ルソーは、ラ・フォンテーヌが《*sur un arbre perché*》「とまっていた、木の枝に」というように、押韻するために倒置法を用いている点について、普通はこのようには言わないのに、何故このような技法を用いているかという

ことを子供に説明するために、散文proseと韻文versの違いから説明しなければならないと指摘している。要するに、こうした技法を子供に理解させるのは容易ではないということを、ルソーは強調しているのである (②)。

さらに、《Tenait dans son bec un fromage》「チーズを一つ口にくわえて」(《dans》は、元のラ・フォンテーヌの寓話では《en》) という部分については、どの種類のチーズなのか具体的に示す必要があること (④)、子供が鳥を見たことがなければ、鳥のことを話しても無益なこと (①)、また鳥がチーズをくちばしにくわえるということがあるのかと子供に問いかけるべきであり、常に「自然のままの姿」des images d'après natureで描くべきだと、ルソーは主張する (④)。ちなみに、鳥がくわえていたのは、もとのイソップ寓話では肉片であるが、チーズに変わっている。フランスの風土に合わせたのである。但し、チーズに変えられたのは、これが初めてではなく、既にフランス中世の動物寓話『狐物語』において、チーズに変えられている。

次に、《Maître Renard par l'odeur alléché》「狐先生、匂いにいざなわれ」については、狐の本当の性質la natureと寓話での性格le caractèreを区別する必要があると指摘する (④)。この種の批判は、後にファールが『昆虫記』で動物学者の立場から批判しているのと同種のものである。寓話によって動物の何たるかを教えるには、確かに不適切であろう。この点はルソーの指摘するとおりである。また、《alléché》という言葉については、詩だけに用いられる言葉であることを説明する必要があるが、ここでもなぜ散文と韻文で違った話し方をするのか説明する必要があるが、どのように説明するのかと、ルソーは読者に問いかけている (②)。また、《Lui tint à peu près ce langage》「彼 (鳥) にこんな言葉をかけた」という部分についても、狐は話をするのか、鳥と同じ言葉を話すのかと読者に問いかけている。このようにルソーの言っていることを真に受ければ、もとより動物寓話は成り立たないのであり、ここはルソーが皮肉で言っていると思われたい。

次に、《Eh! Bonjour, Monsieur le Corbeau!》「やあ、こんにちは、烏殿」という挨拶に見られるMonsieurという敬称が、ごく普通に敬意をこめて用い

られているということをお供は知らずに、(この敬称に) お目にかかることになるため (①、③)、本来の意味に遡って説明が必要なことを指摘している。

《Que vous êtes charmant! que vous me semblez beau!》「あなたは何て魅力的でしょう。何て美しく見えるのでしょうか」(《charmant》も、ルソーの記憶の誤りであり、元のラ・フォンテーヌの寓話では《joli》「きれい」である) という表現は、同じ言葉が繰り返されていて、子供はこれが冗語法であることを知らずに、普通の表現だと勘違いして、しまりのない表現を学ぶことになる (②)、と警告する。が、強い感動を表現する場合、同義語を繰り返して用いることは、日常でも十分ありうることであろう。

《Vous seriez le Phénix des hôtes de ces bois.》「あなたはこの森の客人の中の不死鳥でしょう」という部分では、《Phénix》「不死鳥」という言葉を理解するには「でたらめな」古代の神話を学ばねばならない (①)、また「森の客人」というのは下らない比喩的な言葉であり、へつらう者が用いるお上品な言葉であって、子供には会話のやり取りでのこのような微妙な心遣いは理解できないのではないか (③)、とルソーは批判する。

《À ces mots le corbeau ne se sent pas de joie.》「このことばを聞いて鳥はわれを忘れる。」という部分の、《ne se sent pas》「われを忘れる」という表現も、子供が実際に経験していなければ理解できないであろう (①) と警告する。《Et pour montrer sa belle voix》「そして自分の美しい声を聞かせようとして」という詩句やこの詩全体を理解するには、鳥の美しい声が実際にどういうものか知っておく必要がある (④) と指摘する。ここでも、文学作品を十分理解するには、前もってそれなりの知識や経験が必要であるという、ルソーの経験主義が批判の根拠になっている。

さらに、ルソーは、《Apprenez que tout flatteur / Vit aux dépens de celui qui l'écoute.》「よく覚えておきなさい、おべっか使いは皆、おべっかに耳を傾ける人の費用で生きていることを」(《flatteur》は元のラ・フォンテーヌの寓話にあるように、正しくは《flatteur》) という詩句は、決して10才の子供には理解できたことはない (①) と断言する。世の中で、ある程度見聞を広げ、

様々な人間の生き様があることを知らなければ、確かにこのような狡猾な生き方を子供は十分には理解できないであろう。このほかにもルソーはいくつかの詩句を取り上げ、子供に説明したくても説明しがたいことを強調している。

要するに、ルソーは、この寓話には子どもの理解できない言葉や表現が満ちていること、子どもはそうした言葉や表現の表す事物や観念を日常の生活体験を通して具体的に知り、十分な知識が身についてから読ませるようにすべきであるということを主張しているのである。

ところで、ルソーは彼の言う「子供」*enfant*を、ここでは10才あるいは12才位と想定している。^(注13) が、彼が指摘するように、当時、実際に、その年頃の子供にとってどの程度理解しがたかったのかということは、子供によって異なるであろうし、詳しく知るすべもないが、ルソーが主張しているのはあくまで原則であり、要は、生活体験から得た諸々の知識によって無理なく理解できるようになった段階で、寓話のみならず、歴史関係の書物なども含め、書物を読み学ばせるようにすべきだと主張しているのである。

次に、ルソーが批判しているのは、いわゆるイソップの寓話の前後に付けられている教訓が、ラ・フォンテーヌの寓話では省かれていることであり、そのため、子供にとっては何が教訓なのか判りにくくなっていて、子供が作者の意図を理解できず、自分の都合の好いように寓話を解釈してしまうことをルソーは、懸念しているのである。^(注14)

『蟬と蟻』については、子供が自尊心から蟻の立場を自分のものとして選び、その結果、困っている者をすげなく笑う蟻を見習うことを子供に教える、とルソーは批判する。『烏と狐』*Le Corbeau et le Renard*は、自分の口からチーズを落とさないようにすることを子供に教えずに、他人の口からチーズを落とさせることを教えてしまう、と批判している。ライオンの登場する寓話では、ライオンが大抵は輝かしい役割を演じているために『ライオンと協力する牝牛と牝山羊と牝羊』*Le Génisse, la Chèvre et la Brebis, en société avec le Lion*の寓話から、子供は、何かものを分け合う場合には、ライオンの例にならって何でも手に入れようとするようになるという。つまり子どもは「不正」を学んでし

まうと言うのである。が、『ライオンと蚋（ブヨ）』*Le Lion et Moucheron*では、子どもは、正々堂々と戦うことができない相手を小さな針で刺すことを学び、『狼と犬』*Le Loup et le Chien*では、子どもは、「節制の教訓」ではなく、気ままな生活態度を学んでしまう、とルソーは指摘している。

ルソーの指摘するように、子供が皆、作者の意図を取り違えてしまうかどうかというは別にして、確かに、ラ・フォンテーヌが元の寓話に示されていた教訓を省いたため、また、大人も興味を楽しく持って読めるよう、皮肉やユーモアがこめられているため、寓話に多義性や曖昧さが生じていることも否定できない。それ故、ルソーの言っているように子供に十分な理解力と判断力を持たないうちから寓話を覚えこませたりすることに反対するののもっともであろう。実際、彼は、歴史上の出来事を家庭教師から学ばされた子供が、その出来事の意味を理解できていないことを知り、子供がよく理解できないことを無理やり学ばせることのナンセンスぶりに驚いたという経験があり、そういう経験が『寓話集』を批判する一因になっていると言えよう。^(注15)

では、教訓の曖昧さから生じるであろう誤解をなくするためには、どうすればよいのか。寓話を語って聞かせたり、寓話を学ばせる立場の人間が、子供の年令や理解力に従って相応の説明をすることによって、作者の意図する教訓の意味を取り違えるということを防ぐことができよう。

4. 昆虫学者ファールによる批判

ジャン＝アンリ・ファールJean-Henri Fabre（1823－1915）は、『昆虫記』第5巻第13章『蟬と蟻の寓話』で、昆虫学者の立場からラ・フォンテーヌの『蟬と蟻』を批判している。^(注16) フランス語に翻案されたこの寓話が、フランスの小学校で「暗記練習の課題」として取り上げられ暗唱させられている事実を、ファールは自分の子どもの頃の経験を振り返って指摘する：《Sa réputation de chanteuse passionnée, imprévisible de l'avenir, a servi de thème à nos premiers exercices de mémoire.》「自分の将来を見通すことのできない、情熱的な歌い手は、私たちの幼少の頃の暗記練習の課題に用いられたのだ。」^(注17) そ

うした教育のために、蟬について間違った観念が子供の脳裏に刻まれてしまうと厳しく指摘する。蟬は、夏の間、歌ってばかりいたため、北風が吹く季節となり、隣の蟻たちのところへやってきて、空腹で死にそうだ、食べ物を貸してくれと頼み込む。歌ってばかりいて、行く末にぶつかるであろう困難を見通せず、他人に頼らねばならないという蟬のネガティブなイメージと、情け容赦のない蟻たちのイメージを幼い子供の頭に刻み込ませるこの寓話は、道徳にも博物学にも悖るもの（「倫理も博物学も無視した大変疑わしい話」《Un récit de valeur fort contestable, où la morale est offensée tout autant que l'histoire naturelle》）であるとファーブルは厳しく批判する。^(注18) その批判の根拠は、この寓話で描かれている蟬の生き様や、蟬と蟻の関係が事実と異なる、あるいは事実と反対であるということである。但し、ラ・フォンテーヌがこの寓話以外で登場する主な動物についてはよく知っていると呼賛を惜しんではない：
 《Il connaît à fond ses premiers sujets, le Renard, le Loup, le Chat, le Bouc, le Corbeau, le Rat, la Belette et tant d'autres, dont il nous raconte les faits et gestes avec une délicieuse précision de détails.》「彼は、主な対象、即ち、狐、狼、猫、山羊、烏、鼠、いたち等を知りぬいていて、その仕業や身振りを微妙なまでに正確に私たちに語っている」^(注19)

では、蟻と蟬の実態はどういうものかファーブルが語っている点について見てみよう。まず、彼は、蟬が冬まで生きられるはずがないことと、穀物や虫を食べないことを挙げている。さらに、ラ・フォンテーヌが蟬を知らない。つまり、蟬の声を聞いたことも見たこともなく、彼にとって蟬はキリギリスであったであろうと推測している。ファーブルの指摘するように、『寓話集』の挿絵を描いたグランヴィルも同じ間違いをしていて、ギターを小脇に抱え、つばを曲げた帽子を被り、スカートが風のために脛にまつわりついているその姿は、確かに誰が見てもキリギリスでしかない。『寓話集』の初版に描かれている『蟬と蟻』の挿絵では、蟬は小さく描かれているため、何の虫であるかよく判らないが、やはり、どう見ても蟬には見えない。^(注20)

ファーブルは、こうした間違いの遠因は、蟬と蟻の寓話を書いたとされるギ

リシャ人に遡ると推測している。この寓話は、インドス川周辺から伝えられ、その時点では蟬以外の何らかの昆虫であり、穀物や小さな虫を食う昆虫であったのが古代ギリシャに伝わり、ギリシャ人にとって身近な存在即ち蟬に変えられたのであろう、とファーブルは推測している。^(注21)

この、ファーブルの推測が正しいかどうかということについては、断言できないが、いわゆるイソップ寓話の中にインド起源のものがあることは、既に指摘されており、この推測には根拠が全く無いのではない。要するに、蟬は、元の話では、穀物や他の小さな昆虫を食う昆虫であったのが、ギリシャの風土に合わせて蟬に変えられた、という訳である。

次に、ファーブルは、蟬の名誉を回復すべく、蟬と蟻の関係について、彼の観測した事実を述べている。彼の言うには、蟬と蟻の寓話にあるように蟬が蟻に食べ物を貸してくれと乞うのではなく、事実上、立場が正反対なのである。7月の暑い日などに、蟬が歌を歌いながら、樹皮に穴をあけ樹液を吸っている時に、喉の乾いた虫たち、とりわけ蟻などが、その小さな穴からこぼれた甘い汁を吸いに周りに急いで寄ってくる。恩恵を受けているのは蟻である。蟬は蟻たちがそうするのを妨げたりしない。反対に、蟻が、樹液を吸っている蟬を邪魔者扱いにしていると、ファーブルは、彼の観測した事実を述べている。

《Une audacieuse s'est permis, sous mes yeux, de lui saisir le suçoir, s'efforçant de l'extraire.》「一匹の大胆な蟻は、私の眼前で、(樹液を吸っている)蟬の吻管をつかみ、それを(樹皮から)引き出そうと懸命になっていた。」^(注22) (括弧内：筆者)

蟬と蟻の立場は、事実上寓話で語られていることと正反対なのである。ファーブルは、ギリシャ古典の時代には、蟬が非常に尊重され蟬への賛辞も見られたことを指摘して、蟻に物乞いをする蟬の名誉の回復を図るべく熱弁を振っている。^(注23)

結び

ラ・フォンテーヌは、『寓話集』の冒頭の献辞で述べているように、彼の書き上げた寓話集をルイ14世の王太子に捧げている。それはもちろん儀礼上のことであるが、広く子供のために教育的な意図で寓話を書いていることに違いはない。ところが、既に触れたように、イソップ寓話では一つ一つの寓話に伝統的に教訓が付されているのに対して、ラ・フォンテーヌの『寓話集』では、元のイソップの寓話集の教訓が、大抵の場合、省かれてしまっているのである。ラ・フォンテーヌが教訓を省いたのは、社交界の人々、つまり大人を意識して説教くさくならないようにするためであると思われるが、その結果として、ルソーのような批判が飛び出すのも、むしろ当然かも知れない。が、この寓話集を評する文人や批評家は、筆者の知る限りでは、概して、ルソーの指摘を、さほど重視していないようである。いずれにせよ、十分な経験や知識のない子供にとっては、この寓話集には、確かに難解な部分が多いであろうが、その文学的な価値には変わりはないであろう。事実、ルソー自身も、フランス語の韻文で書かれたこの寓話集の素晴らしさに賛辞を惜しんでいないのである。昆虫学者ファールも同様であろうが、観察から得た事実を重視する学者としては、蟬と蟻の関係が実際には寓話で描かれているのとは正反対である以上、ラ・フォンテーヌの寓話に対して非を唱えずにはいられなかったのである。

注

(注1) Hippolyte Taine, *La Fontaine et ses Fables*, 27^e édition, Hachette, Paris, 1929, pp.162-163.

(注2) René Descartes, *Discours de la Méthode*, in Descartes : Œuvres et letters, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1978, pp164-167. デカルトは、動物や人間だけでなく、全世界を宇宙全体の仕組みを合理的に説明しようとして膨大な『世界論』(宇宙論)を書き続け、1633年には完成して出版することを考えていたという。しかし、ガリレオが『天文対話』では

のめかしていた地動説がきっかけで宗教裁判にかけられ、有罪の判決を受けたことを知り、『世界論』をまとめて出版することをやめている。デカルトも地動説を認めていたため、ガリレオのように宗教裁判にかけられることを恐れたからである。こうして、後に少しずつ、ばらばらに出版されることになる。『方法序説』もその一つである。

(注3) モンテーニュは、『エッセー』第2巻第12章「レーモン・ズボンの弁護」で次のように述べている。《Qu'il me fasse entendre par l'effort de son discours, sur quels fondements il a bâti ces grands avantages qu'il pense avoir sur les autres créatures.》「彼（＝人間）が他の被造物の上にもっているというあの偉大な優越性は何を基礎にして打ち立てたのかということとを、その推論の力で判るように説明してもらいたいものだ。」(Michel Eyquem de Montaigne, *Essais*, in Montaigne: Œuvres complètes, Textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1976, p.427.) この引用文中の《discours》は、中代フランス語辞典 *Dictionnaire du moyen français* (La collection Trésors de français, Larousse, Paris, 1992) に、discours de raison = raisonnement とあるように「推論」の意。

(注4) Émile Faguet, *La Fontaine*, Société française D'Imprimerie et de Librairie, Paris, 1913, pp.69-70.

(注5) Jean de La Fontaine, *Fables*, in La Fontaine : Œuvres complètes I, Bibliothèque de la Pléiade, 1979, Paris, p.236-240.

(注6) *ibid.*, pp.275-276.

(注7) Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou De l'éducation*, in Jean-Jacques Rousseau : Œuvres complètes IV, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1999, p.351-p.358. 以下、『エミール』からの引用は、この部分からの引用である。

(注8) Laurence Mall, *Émile ou les figures de la fiction*, Voltaire foundation, Oxford, 2002, p.11

(注9) *Émile ou De l'éducation*, p.352.

(注10) idem. ルソーは、『ジュリーあるいは新エロイズ』*Julie ou la Nouvelle Héloïse*においても、ラ・フォンテーヌの寓話を子供に教えることの難しさを、サン＝ブルーに語らせている (Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, in Jean-Jacques Rousseau : Œuvres complètes II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1964, p.581)。ラ・フォンテーヌ自身、『寓話集』序文で、読者が容易に教訓を補うことが容易な場合は省いて、寓話をフランス人にとって楽しいものにすることを重視したことを認めている。

(注11) *Émile ou De l'éducation*, p.1379.

(注12) *Le Grand Robert de la Langue Française*, deuxième édition, dirigée par Alain Rey, Dictionnaires Le Robert, Paris, 2001.

(注13) *Émile ou De l'éducation*, p.355, p.357.

(注14) *ibid.*, p.356.『烏と狐』の場合は、元のイソップの寓話でも教訓が付されていない。狐の最後の言葉が教訓になっているのである。この点は、ラ・フォンテーヌの寓話も同様である。

(注15) *ibid.*, pp.348-349.

(注16) Jean-Henri Fabre, *Souvenirs entomologiques : études sur l'instinct et les mœurs des insectes*, cinquième série, chapitre XIII, *La Fable de la cigale et la fourmi*, édition définitive illustrée, Librairie Delagrave, Paris, 1922, pp.229-243. (Reproduction par Rinsen Book Co., Kyoto, 1990年)

(注17) *ibid.*, p.229.

(注18) *ibid.*, p.230.

(注19) *ibid.*, p.231.

(注20) Jean de La Fontaine, *Fables choisies*, avec des notices par Claude Dreyfus, t.1 (Nouveaux classiques Larousse), Larousse, Paris, 1971, p.32. Jean de La Fontaine, *Fables*, in La Fontaine : Œuvres complètes, Fables, Contes et Nouvelles, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1991,

p.31.

(注21) Fabre, pp.232-233.

(注22) *ibid*, p. 236.

(注23) *ibid*, p.237.

参考文献

- Émile Faguet, *La Fontaine*, Société française d'Imprimerie et de Librairie, Paris, 1913.
- Hippolyte Taine, *La Fontaine et ses Fables*, 27^e édition, Hachette, Paris, 1929.
- *Ésope : Fables*, texte établi et traduit par Émile Chambry, 3^e tirage, Société d'Édition «LES BELLES LETTRES», Paris, 1967.
- Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou De l'éducation*, in Jean-Jacques Rousseau : Œuvres complètes IV , Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1969.
- Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, in Jean-Jacques Rousseau : Œuvres complètes II , Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1964.
- Jean de La Fontaine, *Fables choisies*, avec des notices par Claude Dreyfus, t.1, t.2 (Nouveaux classiques Larousse), Larousse, Paris, 1971.
- Michel Eyquem de Montaigne, *Essais*, in Œuvres complètes, Textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1976.
- René Descartes, *Discours de la Méthode*, in *Descartes Œuvres et lettres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1978.
- Jean de La Fontaine, *Fables*, in La Fontaine : Œuvres complètes I , Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1979.
- Jean-Henri Fabre, *Souvenirs entomologiques : études sur l'instinct et les*

mœurs des insectes, cinquième série, chapitre XIII, *La Fable de la cigale et la fourmi*, édition définitive illustrée, Librairie Delagrave, Paris, 1922, pp.229-243. (Reproduction par Rinsen Book Co., Kyoto, 1990)

- ・ Jean de La Fontaine, *Fables*, in La Fontaine : Œuvres complètes I, Fables, Contes et Nouvelles, Bibliothèque de la Pléiade, 1991, Paris.
- ・ Laurence Mall, *Émile ou les figures de la fiction*, Voltaire foundation, Oxford, 2002.

